

日蓮大聖人御書全集

ししんごほんしやう

四信五品抄

新版  
264  
〜  
271

# 四信五品抄

けんじ ねん がつ にち さい と き じやうにん

建治 3 年 ('77) 4 月 10 日 56 歳 富木常忍

せいふひとゆい おく た そうら お  
青鳧一結、送り給び候い了わんぬ。

こんらい がくしやいちどう ごぞんち い ざいせ めつごこと  
今来の学者一同の御存知に云わく「在世・滅後異なりと

ほつけ しゆぎやう かなら さんがく ぐ ひと か  
いえども、法華を修行するには必ず三学を具す。一つを欠

じやう うんぬん  
いても成ぜず」云々。

よ としごろ ぎ そん いちだいしやうぎやう  
余また年来この義を存するところ、一代聖教はしばら

お ほけきやう い ぎ けんもん じよ しよう  
くこれを置く、法華経に入つてこの義を見聞するに、序・正

にだん お るつう いちだん まつぼう みやうきやう  
の二段はしばらくこれを置く、流通の一段は末法の明鏡

えゆう

なり、もつとも依用となすべし。しかしして、流通るつうにおいて二

るつう

ふた

あ いち

つ有り。一には、いわゆる迹門の中の法師等の五品なり。

しやくもん

なか

ほつしとう

ごほん

に

ほんもん

なか

ふんべつくだく

はんぽん

きよう

お

二には、いわゆる本門の中の分別功德の半品より経を終わ

じゆういつぽんはん

じゆういつぽんはん

ごほん

あ

るまで十一品半なり。この十一品半と五品と合わせて

じゆうろつぽんはん

なか

まつぼう

い

ほつけ

しゆぎよう

そうみよう

十六品半、この中に末法に入つて法華を修行する相貌

ふんみよう

ことゆ

ふげんぎよう

ねはんぎようとう

分明なり。これになお事行かずんば、普賢経・涅槃経等を

ひ

きた

きゆうめい

かく

引き来つてこれを糾明せんに、その隠れなきか。

なか

ふんべつくだくほん

ししん

ごほん

ほつけ

しゆぎよう

その中に、分別功德品の四信と五品とは、法華を修行す

たいよう

ざいせ

めつご

ききよう

けいけい

いちねんしんげ

るの大要、在世・滅後の亀鏡なり。荊溪云わく「一念信解と

すなわ

ほんもんりゆうぎよう

はじめ

うんぬん

なか

げんざい

は、即ちこれ本門立行の首なり」云々。その中に現在の

ししん

はじ

いちねんしんげ

めつご

ごほん

だいいち

しよずいき

四信の初めの一念信解と滅後の五品の第一の初随喜と、こ

にしよ

いちどう

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

ほうきよう

じつぼうさんぜ

の二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋、十方三世の

しよぶつ

い

もん

諸仏の出ずる門なり。

てんだい

みようらく

ふた

しyouけん

にしよ

くらい

さき

天台・妙楽の二りの聖賢、この二処の位を定むるに、

みつ

しやくあ

そうじ

じっしん

てつりん

くらい

三つの釈有り。いわゆる、あるいは相似・十信・鉄輪の位、

かんぎようごほん

しよほん

くらい

みだんけんじ

あるいは観行五品の初品の位にして未断見思、あるいは

みようじそく

くらい

しかん

ふじよう

え

い

ぶつし

名字即の位なり。止観にその不定を会して云わく「仏意知

がた

き

おもむ

いせつ

か

かいげ

なん

り難し。機に赴いて異説す。これを借りて開解せば、何ぞ

わづら

ねんご

あらそ

うんぬんとう

労わしく苦ろに諍わん」云々等。

よ ところ

い

みつ

しやく うち

みようじそく

きようもん

かな

予が意に云わく、三つの積の中、名字即は経文に叶う

めつご

ごほん

はじ

いっぽん

と

い

きし

か。滅後の五品の初めの一品を説いて云わく「しかも毀皆せ

ずいき

ところ

お

もん

そうじ

ごほん

わた

ずして、随喜の心を起こす」。もしこの文、相似・五品に渡

きし

ことば

びん

らば、「しかも毀皆せずして」の言は便ならざるか。なか

じゆりようほん

しっしん

ふしっしん

とう

みな

みようじそく

んずく寿量品の「失心、不失心」等は、皆、名字即なり。

ねはんぎよう

しん

しん

ないしきれん

涅槃経に「もしは信ずるも、もしは信ぜざるも乃至熙連」

かんが

いちねんしんげ

しじ

うち

しん

とあり。これを勘えよ。また「一念信解」の四字の中の「信」

いちじ

ししん

はじ

こ

げ

いちじ

のち

うば

の一字は四信の初めに居し、「解」の一字は後に奪わるるが

ゆえ 故なり。もししからば、無解有信は四信の初位に当たる。経きよう

だいにしん と い りやくげごんしゆ うんぬん き く い

に第二信を説いて云わく

「略解言趣」云々。記の九に云わ

く「ただ初信のみを除く。

初めは解無きが故に」。

したがつ

て、次下の随喜品に至つて、

上の初随喜を重ねてこれを

分明にす。五十人これ皆展転して劣るなり。第五十人に至

つて二つの釈有り。一には、

謂わく「第五十人は初随喜の

内なり」。

二には、謂わく「第五十人は初随喜の外なり」と

いうは名字即なり。「教いよいよ実なれば位いよいよ下し

という釈は、この意なり。四味三教よりも円教は機を撰

ふんみよう

ごじゆうにん

みなてんでん

おと

だいごじゆうにん

いた

ふた しゃくあ いち い だいごじゆうにん しまづいき

うち

に

い

だいごじゆうにん

しまづいき

ほか

内なり」。二には、謂わく「第五十人は初随喜の外なり」と

いうは名字即なり。「教いよいよ実なれば位いよいよ下し

という釈は、この意なり。四味三教よりも円教は機を撰

にぜん えんぎよう ほけきよう き おさ しやくもん ほんもん

め、爾前の円教よりも法華経は機を撰め、迹門よりも本門

き っ きようみじついみげ きよう じつ

は機を尽くすなり。「教弥実位弥下（教いよいよ実なれば

くらい くだ ろくじ こころ とど あん

位いよいよ下し）」の六字、心を留めて案ずべし。

と まっぼう い しょしん ぎようじゃ かなら えん さんがく ぐ

問う。末法に入つて初心の行者、必ず円の三学を具す

いな

るや不や。

こた い ぎだいじ ゆえ きようもん かんが い

答えて曰わく、この義大事たるが故に、経文を勘え出だ

きへん そうふ ごほん しょ に さんぽん ほとけまさ

して貴辺に送付す。いわゆる五品の初・二・三品には、仏正

かい じよう にほう せいし いっこう え いちぶん かぎ え

しく戒・定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。慧ま

た たい しん え か しん いちじ せん

た堪えざれば、信をもつて慧に代え、信の一字を詮となす。

ふしん いったせんだい ほうぼう いん しん えい いん みようじそく くらい てんだい  
不信は一闡提・謗法の因、信は慧の因、名字即の位なり。天台

い そうじ やく しょう へだ わす みようじ  
云わく「もし相似の益ならば、生を隔つるも忘れず。名字・

かんぎよう やく しょう へだ すなわ わす わす  
観行の益ならば、生を隔つれば即ち忘れ、あるいは忘れ

あ わす もの ちしき あ しゆくぜんかえ しょう  
ざるも有り。忘るる者も、もし知識に値わば宿善還つて生

あくゆう あ すなわ ほんしん うしな うんぬん おそ  
ず、もし悪友に値わば則ち本心を失う」云々。恐らくは、

ちゆうこ てんだいしゆう じかく ちしよう りようだいし てんだい でんぎよう ぜん  
中古の天台宗の慈覚・智証の両大師も、天台・伝教の善

ちしき いはい こころ むい ふくうとう あくゆう うつ まっだい  
知識に違背して、心は無畏・不空等の悪友に遷れり。末代

がくしや えしん おうじようようしゆう じよ おうわく ほつけ ほんしん  
の学者、恵心の往生要集の序に狂惑せられて、法華の本心

うしな みだ ごんもん い たいだいしゆしょう もの かこ  
を失い、弥陀の権門に入る。退大取小の者なり。過去を

もつてこれを惟うに、おも 未来無数劫をみらいむしゅこう 経るも、ふ 三悪道にさんあくどう 処せ

ん。「もし悪友あくゆうに値わばあ 則ち本心をすなわ 失う」とは、ほんしん これなり。うしな

問うて曰わく、と その証しょういかん。

答えて曰わく、こた 止観しかんの第六だいろくに云わく「前教ぜんきようにその位くらいを高たか

くする所以ゆえんは、方便ほうべんの説せつなればなり。円教えんぎようの位下くらいひくきは、

真実しんじつの説せつなればなり。弘決ぐけつに云わく『前教ぜんきよう』より下しもは、

正しく権実まさを判ごんじつず。教まさいよいよ実ほんなれば位きよういよいよ下くらく、

教きよういよいよ権ごんなれば位くらいよいよ高たかきが故ゆえに。また記きの九く

に云わく「位くらを判ほんずとは、観境かんきよういよいよ深ふかく実位じつくらいよいよ

ひく

あらわ

うんぬん

たしゅう

お

てんだいいちもん

よ下きを顕す」云々。他宗はしばらくこれを置く、天台一門

がくしやとう

なん

じつくらひ

ひく

しゃく

さしお

えしん

の学者等、何ぞ「実位いよいよ下し」の釈を闍いて恵心

そうず

ふで

もち

い

ち

くう

かく

しょう

お

僧都の筆を用いるや。畏・智・空と覚・証とのことは、追つ

なら

だいじ

だいじ

いちえんぶだいいいち

だいじ

てこれを習え。大事なり、大事なり、一闍浮提第一の大事な

こころあ

ひと

き

のち

われ

うと

り。心有らん人は聞いて後に我を外め。

と

い

まつだいしよしん

ぎようじゃ

なにも

せいし

問うて云わく、末代初心の行者に、何物をか制止するや。

こた

い

だん

かいとう

ごど

せいし

いっこう

答えて曰わく、檀・戒等の五度を制止して一向に

なんみようほうれんげきよう

ただ

いちねんしんげ

しよざいき

げぶん

南無妙法蓮華経と称えしむるを、一念信解・初随喜の気分と

すなわ

きよう

ほんい

なすなり。これ則ちこの経の本意なり。

疑うたがつて云いわく、この義ぎいまだ見聞けんもんせず。心こころを驚おどろかし、  
耳みみを迷まよわす。明あきらかに証文しょうもんを引ひいて、請こう、苦ねんごろにこれ  
をしめ示めせ。

答こたえて曰いわく、経きように云いわく「我わがためにまた塔寺とうじを起たて、  
および僧坊そうぼうを作り、四事しじをもつて衆僧しゆそうを供養くようすることを須もち  
いず」。この経文きようもん、明あきらかに初心しよしんの行者ぎようじやに檀だん・戒等かいとうの五度ごど  
を制せいし止しする文もんなり。

疑うたがつて云いわく、汝なんじが引ひくところの経文きようもんは、たゞ寺塔じとうと  
衆僧しゆそうとばかりを制せいし止しして、いまだ諸もろもろの戒等かいとうに及およばざるか。

こた い はじ あ のち りやく  
答えて曰わく、初めを挙げて後を略す。

と い なに し  
問うて曰わく、何をもつてこれ知らん。

こた い つぎしも だいしほん きようもん い  
答えて曰わく、次下の第四品の経文に云わく「いわんや、

ひとあ よ きよう たも か ふせ じかいとう  
また人有つて、能くこの経を持ち、兼ねて布施・持戒等を

ぎよう うんぬん きようもんふんみよう しょ に さんぼん ひと だん  
行ぜんをや」云々。経文分明に初・二・三品の人には檀・

かいとう ごど せいし だいしほん いた はじ ゆる のち  
戒等の五度を制止し、第四品に至つて始めてこれを許す。後

ゆる し はじ せい  
に許すをもつて知んぬ、初めは制することを。

と い きようもん いちおう あいに しょしやくあ  
問うて曰わく、経文、一往、相似たり。はたまた疏釈有

りや。

こた い なんじ たず しやく がつし しえ  
答えて曰わく、汝が尋ぬるところの釈とは、月氏の四依

ろん かんどう にほん にんし しょ ほん す まつ  
の論か、はたまた漢土・日本の人師の書か。本を捨てて末を

たず たい はな かげ もと みなもと わす なが たつと  
尋ね、体を離れて影を求め、源を忘れて流れを貴ぶ。

ふんみよう きようもん さしお ろんしやく こ たず ほんきよう そうい  
分明なる経文を闇いて、論釈を請い尋ぬ。本経に相違

まつしやくあ ほんきよう す まつしやく つ  
する末釈有らば、本経を捨てて末釈に付くべきか。

この したが しめ もんぐ  
しかりといえども、好みに随つてこれを示さん。文句の

く い しょしん えん ふんどう しょうぎよう しゅ さまた  
九に云わく「初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨

おそ ただ もつぱ きよう たも すなわ  
げんことを畏る。直ちに専らこの経を持つは、即ち

じようくよう じ はい り せん やく ぐた  
上供養なり。事を廃して理を存するは、益するところ弘多な

り」。この釈しやくに「縁えん」と云うは、五度ごどなり。初心しよしんの者もの兼かね

て五度ごどを行ぎようずれば、正業しようぎようの信しんを妨さまたぐるなり。譬たとえば、

小船しようせんに財たからを積つんで海うみを渡わたるに、財たからとともに没ぼつするがごと

し。「直ただちに専もつぱらこの経きようを持たもつ」と云うは、一経いに亘いつきようる

にあらず。専もつぱら題目だいもくを持たもつて余文よもんを雑まじえず。なお一経いつきようの

読誦どくじゆをも許ゆるさず。いかにいわんや五度ごどをや。「事じを廢はいして理り

を存そんす」と云うは、戒等かいとうの事じを捨すてて、題目だいもくの理りを専もつぱらに

す云々。益やくするところ弘多ぐたなり」とは、初心しよしんの者もの、諸行しよぎようと

題目だいもくとを並ならび行ぎようずれば、益やくするところ全まったく失うしなう云々。うんぬん

もんぐい

と

きよう

たも

すなわ

文句に云わく「問う。もししからば、経を持つは即ち

だいいちぎかい

なに

ゆえ

よ

かい

たも

もの

い

これ第一義戒なり。何が故ぞまた能く戒を持つ者と云うや。

こた

しよほん

あ

まさ

のち

なん

な

答う。これは初品を明かす。応に後をもつて難を作すべか

とううんぬん

とうせい

かくしや

しやく

み

まつだい

ぐにん

らず」等云々。当世の学者、この釈を見ずして、末代の愚人

なんがく

てんだい

にしよう

どう

あやま

なか

あやま

をもつて南岳・天台の二聖に同ず。誤りの中の誤りなり。

みようらくかさ

あ

い

と

妙楽重ねてこれを明かして云わく『問う。もししから

じとう

しきしん

こつ

もち

まさ

ば』とは、もし事の塔および色身の骨を須いずんば、また応

じ

かい

たも

もち

ないしじ

そう

くよう

に事の戒を持つことを須いず、乃至事の僧を供養すること

もち

とううんぬん

でんぎようだいしい

を須いざるべしやとなり」等云々。伝教大師云わく

にひやくごじつつかい

す お

きようだいしいちにん

「二百五十戒たちまちに捨て畢わんぬ」。ただ教大師一人

かぎ

がんじん

でし

によほう

どうちゆう

のみに限るにあらず、鑑真の弟子の如宝・道忠ならびに

しちだいじとういちどう

す

お

きようだいし

みらい

いまし

七大寺等一同に捨て了わんぬ。また、教大師、未来を誠め

い

まつぼう

なか

じかい

ものあ

けい

い

いち

て云わく「末法の中に持戒の者有らば、これ怪異なり。市に

とらあ

たれ

しん

うんぬん

虎有るがごとし。これ誰か信ずべき」云々。

と

なんじ

なん

いちねんさんぜん

かんもん

かんじん

だいもく

問う。汝、何ぞ、一念三千の観門を勧進せず、ただ題目

とな

ばかりを唱えしむるや。

こた

い

にほん

にじ

ろくじゅうろつこく

おさ

つ

答えて曰わく、日本の二字に六十六国を撰め尽くして、

にん

ちく

ざいひと

のこ

がっし

りようじ

しちじつかこくな

人・畜・財一つも残らず。月氏の両字にあに七十箇国無か

みょうらくい

りやく

きょうだい

あ

げん

いちぶ

らんや。妙楽云わく「略して経題を挙ぐるに、玄に一部

おさ

い

りやく

かい

によ

あ

を収む」。また云わく「略して界・如を挙ぐるに、つぶさ

さんぜん

おさ

もんじゆしりぼさつ

あなんそんじや

さんえはちねん

あいだ

に三千を撰む」。文殊師利菩薩・阿難尊者、三會八年の間の

ぶつご

あ

みょうほうれんげきよう

だい

つぎしも

りようげ

い

仏語、これを挙げて妙法蓮華経と題し、次下に領解して云

われき

うんぬん

わく「かくのごときを我聞きき」云々。

と

ぎし

ひと

なんみょうほうれんげきよう

とな

問う。その義を知らざる人、ただ南無妙法蓮華経とのみ唱

ぎげ

くどく

そな

いな

うるに、義を解する功德を具うや不や。

こた

しょうに

にゆう

ふく

あじ

し

じねん

答う。小児、乳を含むに、その味を知らざれども自然に

みやく

ぎば

みょうらく

たれ

わきま

ふく

みずこころ

身を益す。耆婆が妙薬、誰か弁えてこれを服せん。水心

な 無けれども火を消す。ひもの 火物を焼くに、あに覚り有らんや。

りゆうじゆ てんだいみな ところ かさ しめ  
竜樹・天台皆この意なり。重ねて示すべし。

と なに ゆえ だいもく ばんぼう ふく  
問う。何が故ぞ題目に万法を含むや。

こた しょうあんい じよおう きよう げんい の  
答う。章安云わく「けだし、序王とは経の玄意を叙ぶ。

きよう げんい もん ところ の もん ところ しゃくほん す  
経の玄意は文の心を述ぶ。文の心は迹本に過ぎたるは

なし」。みょうらくい ほつけ もん ところ い しよきよう しよい  
妙楽云わく「法華の文の心を出だして諸教の所以

を弁ず」云々。うんぬん じよくすいところ な つき え おの す  
濁水心無けれども、月を得て自ずから清め

り。そうもくあめ う さと あ はなさ  
草木雨を得るに、あに覚り有つて花かんや。

みようほうれんげきよう ごじ きようもん ぎ  
妙法蓮華経の五字は、経文にあらず、その義にあらず、

ただ一部の意なるのみ。初心の行者、その心を知らざれ

ども、しかもこれを行ずるに、自然に意に当たるなり。

問う。汝が弟子、一分の解無くして、ただ一口

南無妙法蓮華経と称うるものは、その位いかん。

答う。この人は、ただ四味三教の極位ならびに爾前の円人

に超過するのみにあらず、はたまた真言等の諸宗の元祖、

畏・儼・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出すること百千万億倍

なり。

請う、国中の諸人、我が末弟等を軽んずることなかれ。進

かこ たず

はちじゅうまんおくごうくよう

だいぼさつ

んで過去を尋ぬれば、八十万億劫供養せし大菩薩なり。あ

きれんいちごう もの

しりぞ

みらい

ろん

に熙連一恒の者にあらずや。退いて未来を論ずれば、

はちじゅうねん

ふせ

ちようか

ごじゆう

くどく

そな

てんし

八十年の布施に超過して五十の功德を備うべし。天子の

むつき まと

だいいりゆう

はじ

しよう

べつじよ

襁褓に纏われ、大竜の始めて生ずるがごとし。蔑如するこ

べつじよ

となかれ、蔑如することなかれ。

みようらくい

のうらん

もの

こうべしちぶん

わ

くよう

妙楽云わく「もし悩乱する者は頭七分に破れ、供養する

もの

ふくじゆうごう

す

う だえんおう

びんずるそんじゃ

ことあらん者は福十号に過ぐ」。優陀延王は賓豆盧尊者を

べつじよ

しちねん

うち

み

そうしつ

そうしゆう

にちれん

るざい

蔑如して七年の内に身を喪失し、相州は日蓮を流罪して

ひやくにち

うち

ひようらん

あ

きよう

い

百日の内に兵乱に遇えり。経に云わく「もしまたこの

きようてん

じゆじ

ものみ

かあく

い

じつ

經典を受持せん者を見て、その過悪を出ださば、もしは実

ふじつ

ひと

げんせ

びやくらい

やまい

にもあれ、もしは不実にもあれ、この人は現世に白癩の病

え

ないしもろもろ

あくじゆうびよう

い

まさ

を得ん乃至諸の悪重病あるべし」。また云わく「当に

せぜ

まなこな

とううんぬん

みようしん

えんち

げん

びやくらい

世々に眼無かるべし」等云々。明心と円智とは現に白癩

え

どうあみ

むげん

ものな

こくちゆう

えきびよう

こうべしちぶん

を得、道阿弥は無眼の者と成りぬ。国中の疫病は「頭七分

わ

ばち

とく

おも

わ

もんじんとう

ふくじゆうごう

に破る」なり。罰をもつて徳を惟うに、我が門人等は「福十号

す

うたが

に過ぐ」疑いなきものなり。

そ

にんのうさんじゆうだいきんめい

ぎよう

はじ

ぶつぼうわた

夫れ、人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りしより

このかた

かんむ

ぎよう

いた

にじゆうだいにひやくよねん

あいだ

ろくしゆう

以来、桓武の御宇に至るまで、二十代二百余年の間、六宗

あ

ぶつぼう

さだ

えんりやくねんちゆう

有りといえども、仏法いまだ定まらず。ここに、延暦年中

ひと

しようにんあ

くに

しゅつげん

でんぎよう

に一りの聖人有つて、この国に出現せり。いわゆる伝教

だいし

ひと

さき

ぐつう

ろくしゆう

きようめい

大師これなり。この人、先より弘通せる六宗を糾明して

しちじ だし

えいざん

た

ほんじ

しよじ

七寺を弟子となし、ついに叡山を建てて本寺となし、諸寺を

と まつじ

にほん

ぶつぼう

いちもん

おうぼう

ふた

取つて末寺となす。日本の仏法ただ一門のみなり。王法も二

ほうさだ

くにす

く ろん

みなもと

い

つにあらず。法定まり国清めり。その功を論ぜば、源、「已

こんとう

もん

い

今当」の文より出でたり。

のち

こうぼう

じかく

ちしyou

さんだいし

じ

かんど

よ

その後、弘法・慈覚・智証の三大師、事を漢土に寄せて

だいにち

さんぶ

ほけきyou

すぐ

い

きyouだいし

「大日の三部は法華経に勝る」と謂い、あまつさえ教大師

けず

しんごんしゅう

しゅう

いちじ

そ

はつしゅう

の削るところの真言宗の宗の一字、これを副えて八宗と

うんぬん

さんにんいちどう

ちよくせん

もう

くだ

にほん

ぐつう

てら

云々。三人一同に勅宣を申し下して日本に弘通し、寺ごと

ほけきよう

ぎ やぶ

いこんとう

もん

やぶ

に法華経の義を破る。これひとえに、「已今当」の文を破ら

しゃか

たほう

じつほう

しよぶつ

だいおんてき

な

んとして、釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵と成りぬ。し

のち

ぶつぼうようや

すた

おうぼうしだい

おとろ

てんしやうだいじん

かる後、仏法漸く廃れ、王法次第に衰え、天照太神・

しやうはちまんとう

くじゆう

しゆごしん

ちから

うしな

ぼんたい

してん

くに

正八幡等の久住の守護神は力を失い、梵帝・四天は国を

さ

ぼうこく

な

こころあ

ひと

たれ

いた

去つて、すでに亡国と成らんとす。情有らん人、誰か傷み

なげ

せん

さんだいし

じゃほう

おこ

ところ

嗟かざらんや。詮ずるところ、三大師の邪法の興る所は、

とうじ

えいざん

そうじいん

おんじやうじ

さんしよ

きんじ

いわゆる東寺と叡山の総持院と園城寺との三所なり。禁止

せ<sup>こくど</sup>ずんば、国<sup>めつぼう</sup>土<sup>しゆじよう</sup>の滅<sup>あくどう</sup>亡<sup>うたが</sup>と衆<sup>うたが</sup>生<sup>うたが</sup>の悪<sup>うたが</sup>道<sup>うたが</sup>と疑<sup>うたが</sup>いなきものか。予<sup>よ</sup>

ほ<sup>むね</sup>ぼこの旨<sup>かんが</sup>を勘<sup>こくしゆ</sup>え国<sup>しめ</sup>主<sup>しめ</sup>に示<sup>しめ</sup>すといえども、あ<sup>じよよう</sup>えて叙<sup>じよよう</sup>用<sup>な</sup>無<sup>な</sup>し。

悲<sup>かな</sup>しむべし、悲<sup>かな</sup>しむべし。